稲垣 治郎 名誉院長
院長在任1996年8月～2000年8月

藤田 民夫 名誉院長
院長在任2004年8月～2014年3月

長谷川 真司 院長
院長就任2014年4月～現在

おかげさまで開院30年
みなさん、ありがとうございます。

名古屋記念病院(名古屋市天白区平針)が今年4月開院30年を迎えた。
開院以来「もてなしのHOSPITALITY」と「しあわせのHAPPY」をあわせた「HOSPY(ホスピー)」をあいことばに
職員全員が一丸となって患者サイドに立った質の高い医療の提供と地域医療の充実に全力で取り組んできた。
この目標に向かってのゆるぎない結束が着実に成果をあげ
地域医療支援病院、愛知県がん診療拠点病院、災害拠点病院・救急指定病院の承認・指定を受けたほか
2011年には社会医療法人となり、より公益性の高い医療機関としての役割を担いながらたゆまない努力を続けた結果、
地域や社会から大きな安心と信頼を得るまでに至った。
名古屋記念病院30年の歩みとこれからの取り組むべき道などについて院長と歴代院長に語っていただいた。

取材・文
読売新聞中部支社 前編集委員
医療コーディネーター
片岡　太

――名古屋記念病院開院30年を迎えおめでとうございます。

長谷川院長　ありがとうございます。名古屋記念病院は1985年4月に開院し、今年30年を迎えることができました。これはひとえに地域の皆様、地域の医療機関の先生方、そして職員の皆様に支えて頂いてのことで本当に感謝しています。

――開院30年ということなので少し当時のことを振り返ってみたいと思います。名古屋記念病院の初代院長には国立がんセンター副院長を務めた木村禧代二先生、そのあと愛知県がんセンター総長を務めた太田和雄先生と国内外でがん分野において高い実績を誇る2人の先生が院長を務めました。また、当時としては初めてがんを重点的に治療する腫瘍科を診療科目に取り入れるなど民間の病院でありながらがん医療に積極的に取り組んだことから「第二のがんセンター」として名古屋記念病院はその存在が全国に知られるようになりました。

――稲垣先生はいつ院長になられましたか。

稲垣名誉院長　私は腫瘍科部長として名古屋記念病院に来ましたが、太田先生が体調を崩されたときに院長代理を務め、1996年8月に院長になりました。

――当時はがんで亡くなる患者さんが増加し、社会的にもがん医療が問題になっていた時代です。このため、名古屋記念病院は腫瘍科を作り積極的にがんの治療に取り組みました。これが名古屋記念病院の大きな特徴で注目されました。稲垣先生、当時のがんの治療はどのようなものでしたか。

稲垣名誉院長　私はがん専門の内科医なので、どのような抗がん剤がどんながんに効くのか、どんな副作用がでてそれをいかに克服するかなどを中心に内科的治療を行っていました。幸い、木村先生や太田先生が豊富な臨床経験をお持ちで集学的治療法に力を入れておられましたので、それをベースに治療を行い、かなりの成果を上げていたと思っています。また、積極的に学会や研究会などで発表を行い名古屋記念病院のがんに対する評価は高いものがありました。私が院長在任中には腫瘍科をはじめ既存の科に加えて総合病院として小児科、呼吸器外科などの診療を開始するなどほかの診療科の充実にも取り組みました。

――今の名古屋記念病院のがん治療のレベルはどうですか。

稲垣名誉院長　名古屋記念病院には開院以来30年間蓄積された臨床データと豊富な臨床経験を積んだ優秀ながんの内科医や外科医、その他の科の医師がおり、エビデンス(証拠)に基づいたがん治療を確実に行う医療体制ができており、がんに対する治療レベルは高いと思っています。

――現在のがん治療は遺伝子治療など稲垣先生が現役の時に比べかなり進歩しています。そうした中で名古屋記念病院のがん治療の取り組むべき道は。

稲垣名誉院長　遺伝子治療といった最先端の研究的治療はがんセンターなど高度医療機関などにお任せし、名古屋記念病院はその中からエビデンスの確立されてきている治療を確実に、そして着実に行っていくということが非常に大事です。そしてそれが名古屋記念病院のがん治療の取るべき道ではないかと私は思っています。現在では遺伝子の基礎的研究の成果が臨床に導入され、実績をあげているものが多く認められるようになりました。

――藤田先生はいつから院長になられましたか。

藤田名誉院長　2004年8月に院長になりました。

――藤田先生が院長に就かれたときは、医療費削減といった国の医療政策の転換期で厳しい時期でしたね。

藤田名誉院長　少子・高齢化に伴い、年々増大する医療費にどう対処するかが社会問題化し、医療費を抑制する医療政策が本格的に始まりました。そうした中で、名古屋記念病院が安定した医療経営を継続し、いかにして質の高い医療を患者さんや地域住民に提供していくかということを第一の大きな目標として取り組んできました。

――具体的にどのように対応しましたか。

藤田名誉院長　患者さんや地域からの医療に対するニーズは年々高まり、その要望に的確に対応するためにはまず院内の医療機能を把握する必要があると考え、医局・看護部・コメディカル部門と毎年ヒアリングを行う取り組みを始めました。これらの結果を病院の事業計画策定にも反映してきました。

――こうした取り組みの背景は何ですか。

藤田名誉院長　現状の名古屋記念病院を取り巻く医療経営を全職員にも実感してもらい、あわせて建設的な意見が出ることを期待してヒアリングを行い、この結果を公表することで職員が現状を認識し、共有することにつながったと考えています。

――かなり大胆な意識改革に取り組みましたね。

藤田名誉院長　名古屋記念病院の原点である腫瘍科を生かしながら、他の診療科を充実させ、患者さんや地域からの多様な医療ニーズに的確に対応するには、上から決めたことを各部署に通達するだけでは真の意識改革は実現しません。どうしても全職員の考えが一つになったものでなければ、患者さんや地域の方々に質の高い医療を提供することはできないと思ったので全職員に参加していただきました。

次ページへ続く→